

速成特別展の企画とアイデア

—— 資料の活かし方、使い方 ——

小林貞七

本年度（昭56）早々には、博物館の増築工事、改装工事最中でとても特別展などできる筈もないと思っていたが、いろいろの障害もあって、工事着工が意外に遅れることが分ってきた。

これでは毎年春の特別展は実施せざるを得ないだろうと、急遽準備に取り組んだのが、今次の特別展で、名付けて『話題の新資料展』とした。思い付き的展示と言われそうな気もする。でも常々資料活用の熱意が働いてさえいれば、新鮮なアイデアと企画が窮屈した中からも生まれ出るものである。それに不断から資料収集、資料作製の眼と心を働かせて、こまめな活動を続けなければ、幅広い蓄積ができるてくる。しかも、自ら手掛けた資料ほど何かの機会に役立ち、不思議とうまく活かされる道が開けてくる。

今回の展示資料の大半は、昨年来に収集したものであった。殊更に特別展を意識しての計画的収集でもなく、何んでもガメツク採集してやろうの意欲の中の収穫物であった。

断っておきたいが、過去何回かの特別展の多くは、予めテーマを決めて、1、2年前から資料準備に取りかかるのが例で、持合せの資料の乏しい場合は、特に準備の苦労が多かった。岩石展、薬草展などはその好例であろう。

さて、手当たり次第の収集資料から、それをどうまとめてひとつのテーマに仕立て、また系統立てていくかが今回のミソで、『話題の新資料展』の一語でしめくくったものの、果して話題を生む結果を作り出すことができるだろうか。物置小屋の雑多さからは何も生れ出そうもないが、ほこりを払ってひとつひとつに価値を見出して光をあてれば、人目を引く物も出る筈である。何を選び出し、どんな光をあてて構成するかが今次の企画とアイデアである。

○資料の活かし方、使い方 その(1)

昨年の秋に福井市高須城山の海拔 200 m の高さから海の動物化石（主として貝類）の採集を行なった。なぜそんな高いところから海の貝の化石が？の問題意識がなければ、大した興味もなく通り過ぎてしまう平凡な展示に終るだろう。そこが展示資料の活かし方と使い方の工夫ではなかろうかと思う。

高須城の高所から採集された海の貝化石と対象的なのが、やはり昨年秋に博物館職員 3、4 名で何度も出掛けて採集したこれまた海の貝の化石である。敦賀市南東の街外れにできた下水処理場の発掘工事現場である。地表から 7。8 m を掘り下げた地層から珍しい化石が発見された。縄文海進の頃の新しい化石だとその事である。一方は山上にいまひとつは市街地の地下から海の貝の化石が採集されることとは、一般の人々にとっては奇異な感を抱くであろう。二者をセットして考えさせるこ

とで、長い年月の間に変化して止まない、自然界の変動の一端を興味深く理解することができると思ったのである。

○資料の活かし方、使い方 その(2)

縄文海進時の貝化石に混じって、マツカサ、トチの実、エゴノ実、クルミの実が多数採集された中に、たった1つのチャの実と思われるものが発見された。もし確実にチャの実と断定されれば、興味のある話題が提供されそうである。

チャについては、千年の昔に中国から渡来したという説と、日本古来から自生したという二説があるが、二説のいずれを是とするかの詮索材料が出現したことになる。

三方郡の鳥浜の貝塚からヒョウタンの実や、緑豆の実の発見で古い昔に大陸との人の往来が論ぜられる有力な資料となっているが、一粒のチャの実もあれこれ考えるとどんな結論が生れるか結構樂しい話題となりそうに思える。昨年の資料収集では、話題の種になりそうなものを、ことさらに探し求めていたわけではないことは先に述べた。一般的な資料収集作業の中で、たまたまに発見されたことでも、常々の心の構えで、平凡そうなものが立派な展示資料に発展することが多い実例である。

○資料の活かし方、使い方 その(3)

資料を見るシタタかさの眼で思い掛けない掘り出し物を発見した例がある。昨年の夏に、当館の長田学芸員が、博物館の近くで捨てられたマムシの死体を一匹見つけた。意外と腹部が太いので、多分腹に子を持っているのではないかと解剖したら、一匹のタカチホヘビだった。今までに県内で確認されていなかったタカチホヘビは、長田氏によって二個体の連続発見となった。不斷に眼を輝かす者の価値ある収穫であり、このことを強調しての展示だった。

これと並べて動物の性転換資料を展示した。最近に人間を含めての話題になりそうな分野であろう。さらにまた、滅多に見られない、ミヤマクワガタの両性型の一個体も公開した。一個体の左右半々に雌性と雄性を表わす一頭である。性とはいって何だろうかを考えさせられる資料の展示である。

○資料の活かし方、使い方 その(4)

今般の展示での変った企画の一つには、『渚に拾う』コーナーである。厳冬の荒天続きには、磯にも砂浜にも様々な物が打ち揚げられる。私は機会ある毎に海岸に出て漂着物を見たり拾ったりすることに妙な興味を持っている。ある時は猫の白骨死体を拾った。貝を拾い、漁具を集め、朝鮮からの漂流物までに关心を持って種々様々が収集されて、『渚に拾う』の展示コーナーができあがった。展示物は種々雑多だが、それぞれに意味と価値を持つもので、なぜに冬の渚に漂着物が多いのだろうか、どうして遙かの南方からヤシの実まで流れ着くのだろうか、そして朝鮮の生活用具だったものまでこの越前海岸に多数に流れ寄って来たのだろうか、昔に海を挟む両国の人々の往来までが、漂流物で説き明かされる気がするのが、このコーナーの魅力と考えたのである。

○資料の活かし方、使い方 その(5)

博物館の小動物園では、飼育動物が死ぬことが多い。捨てることは簡単だが、私は常々死体といえども無駄にはしないを主義としている。サルが死ねば、せめて頭骨だけでもと、標本材料にする。剥製には間に合いそうもない不完全な野鳥死体では羽だけを切り取って羽のコレクションを作ろうと展羽？して残している。剥製では内臓は不用物だが、これとて切り取って様々な標本作りをしている。今般の特別展の1コーナーに設けた、「腑分けをのぞく」はこうしてできたものである。

各種的心臓標本、脳標本、眼球標本、肺臓標本と可成な数になる。心臓標本を並べて見ても、下等な動物から高等な動物へと、進化の過程が理解できて面白い。外部形態だけに満足すべきものではなく、いま一歩進めて内部構造にまで発展すべきではなかろうか、この主張の表現が、腑分けをのぞくのコーナーであった。

○資料の活かし方、使い方 その(6)

数年前に薬草の特別展を催した中で「飲んでみませんか」のコーナーを設けて大変に好評を得た。ただ見るだけではない。何等かの形で参加し体験することが、何によらず効果的であることをしばしば感ずる。まして物を認識することに欠かすことのできない感覚器（特に視覚）の障害者に博物館が対応できるのは、手で触って知ることのできる展示である。かねがねそんな展示コーナーを設けたいと思いながら、今次の特別展で漸く実現することができた。

この展示で不幸な視力障害者が喜んで下さったことは勿論である。大きなアナコンダ、ジャンボコイ、シャコガイ、足羽山の模型等20余点を、点字の説明まで添えて展示した。一々触覚を通して、未知の物を理解する嬉しさは格別の様だった。

4月14日には盲学校の中学校部数名がこのコーナーを訪れてくれた。彼等の標本への触り方を詳し

写真説明

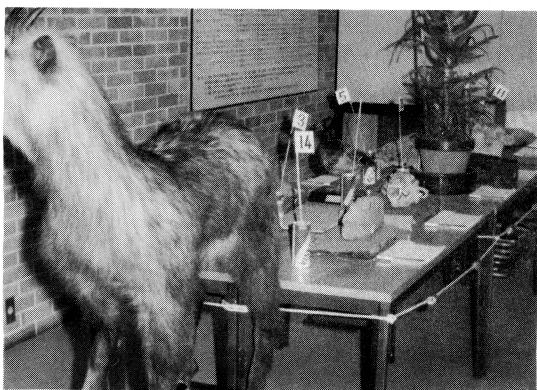
写真 (1) 指先で巧みにシャコガイを調べる視覚障害者

写真 (2) 視覚障害者のための感覚コーナー概要



写 真

(1)



写 真

(2)

く観察して、さすがはと思った。大きなことで知られるシャコガイの触覚観察である。両手の指先で内部の凹凸やつやを撫でながら、その形態を知り、大きさを理解し材質まで察知しようと努めている。手の動きは極めて滑かで、順序を追っての動きが、実に合理的なのに驚く。貝の裏にまで手を廻しての、多角的な調べ方に感心した。この分では目明き以上の理解ができるのではないかとさえ思えた。ある男子学生は、カモシカの性別まで判断するための試みとして、股間を探り、あつたあつたと喜んでいた。

いったい生れながらの視覚障害者には、目明きの吾々が目で見て理解し認識するのとは異質であろうか、ともかく知りたい、わかりたいとの熱望にはせめてその何分の1なりと応えて上げたいと痛感する吾々だった。特別展だけではなく、常設展にも障害者の切なる願いに応ずる一隅が設置されてもよい筈である。将来に館のどこかに是非実現したいと思っている。

○感覚コーナーの展示

このコーナーには18種の資料を展示した。その主なものは、動物ではカモシカ、イタチ、コイ、アヒル等の剥製それに巨大な水へびアナコンダー（ブラジル産）の剥皮、クマの頭骨、シャコガイの貝殻。植物では薬草のアロエ（いしゃいらづ）においを嗅ぐ香い箱（薬草の乾燥品トウキ、ノダケ）。化石、岩石では大きな珪化木、アナダラの多数を含んだ石塊、サヌカイト（木槌でたたいて音を聞く）足羽山（福井市民の憩いの山）の石膏模型。その他野鳥の巣箱を含めて18点。何れも大形でどれも日頃は触れて見ることもなかったと思われるものばかりを選択した。

指先だけでなく、嗅覚も聴覚も働かせてと考えて、あまり触覚オンリーにならない様にと工夫したもの、盲人コンプレックスの解消の一助にしたかったからである。

『没原稿の再登場のことわり』

昨年度は原稿量が予想を上廻り、このために編集者自らの駄文を引き込めて、乏しい印刷費に調子を合せた。今年も金詰りに変りはないが、希望量に達せず、その增量に没原稿の再登場となつたのである。したがつて、原稿内容は昨年のままであることと、苦しい遣り繰りの実情をご承知願いたいと思ったのである。

博物館長